

## 【原著】

**母性看護学実習における学生の技術経験状況と今後の課題  
—母性看護学実習技術経験録より—**

菊地美帆、高島葉子、中島通子

新潟県立看護大学

(受付：平成 23 年 1 月 12 日)

(受理：平成 23 年 1 月 24 日)

**要 旨**

A 大学看護学部における母性看護学実習の技術経験について、学生の同意を得て、技術経験録の自己チェックを集計し技術経験の状況と今後の課題を明らかにした。平成 21 年度 3 年次生 86 名の計 47 項目からなる実習技術経験録の記述統計処理を行った結果、正常な産褥経過をたどった褥婦を受け持った学生は 72 名、帝王切開術後の褥婦 12 名、管理入院中の妊婦 2 名であった。90%以上の学生が経験できた項目は、妊婦ではレオポルド触診法、新生児の技術では、健康診査、黄疸指数測定、おむつ交換、抱き方・寝かせ方であった。また、分娩見学は 19 名 (22.1%)、新生児の沐浴・清拭においては 33 名 (38.4%) であり主に臀部浴介助や衣類の着脱といった内容であった。ハイリスクの増加や出産の減少は実習においても少なからず影響が出ている。今後、先行する母性看護学演習や母性看護方法論の講義内容の検討を行い、実践に即した内容にしてゆく必要がある。

**キーワード：**母性看護、実習、技術経験、課題**諸 言**

文部科学省は、平成 14 年に「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」を提示し学士課程の教育内容として「看護実践を支える技術学習項目」を示した<sup>1)</sup>。さらに大学卒業時の到達目標<sup>2)</sup>が示され技術力の統一と向上が望まれることとなった。

看護学教育における臨地実習の位置づけは、学生が学内で学習した知識・技術・態度の統合を図り、看護の実践能力を習得する必要不可欠な学習である。さらに、対人コミュニケーションといった関係調整能力育成の場でもある。安酸<sup>3)</sup>は、看護技術として経験されるものを『臨床の知』とし、「学内の講義や演習だけでは学習できないものがあって、経験としてしか学べない学力である。だからこそ実習の意味がある」と述べている。また、小山田<sup>4)</sup>は「授業で学習したことを実際に臨床の現場で目にすることは

その知識より身近なものとし捉え後の学習につなげる強力な動機付けになる」と述べており、臨地実習で経験したこと、見学したことは学生にとって意味深いものであると言える。

しかし、臨地実習の時間には限りがあり、また臨地実習における実践力の低下や就職時の実践能力の低下、医療における安全の確保、患者の権利の擁護など臨地実習において学生の経験できる技術が制限されることが多々ある。厚生労働省は平成 15 年に「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会報告書」<sup>5)</sup>を提示したが、母性看護学実習の対象者に対する技術は、難度の高いものも多く、また昨今の分娩数の減少が生んだ貴重な子・出産であるからこそプロにみて欲しいというニーズ等も影響し、実習においては経験できない項目もある。そこで、母性看護学実習における実習技術経験録（以下経験録）より状況を把握し、今後の講

義および演習の課題を明らかにする。

## 研究方法

### 1. 研究対象

A 大学看護学部、平成 21 年度 3 年次生 86 名の計 47 項目からなる経験録より、経験項目の回数、及び受持ち対象の状況を把握した。

### 2. 研究期間

平成 21 年 9 月から平成 22 年 1 月

### 3. 分析方法

経験録の記載内容をデータ化し、Excel 2007 にて入力し記述統計処理を行った。

### 4. 倫理的配慮

経験録は実習記録の一部であることを説明し、データ化することおよびその際個人が特定されないこと、成績に影響しないことを口頭で説明した。

## 結果

### 1. 母性看護学実習の概要

母性看護学実習（3 単位）は、3 年後期の 9 月から翌年 1 月までの 5 ヶ月間を 6 クールに編成し、1 クール 14~15 名が 2 施設に分かれ実習した。施設の分娩件数（H20 年）は A 施設 398/ 年、B 施設 420/ 年である。臨地実習は病棟実習 9 日、外来実習は 1 日であり、病棟実習は、分娩期・新生児期・産褥期実習で構成されている。

産褥期実習では、1 名または 2 名の学生が 1 名の対象を受け持った。受け持ち対象者を、正常経過の褥婦としているが、受け持ち対象者がなく、管理入院中の妊婦を受け持った学生もいた。正常経過の褥婦を受け持った学生は 72 名（83.7%）、帝王切開術後の褥婦は 12 名（14.0%）、管理入院中の妊婦は 2 名（2.3%）であった。

分娩を見学した学生は 19 名（22.1%）、帝王切開術を見学した学生は 6 名（7.0%）であった。分娩第 1 期を受け持った学生は 18 名（20.9%）、帝王切開術の術前術後ケアに同行した学生は 10 名（11.6%）、分娩期実習で対象者がいなかった学生は 33 名（38.3%）であった。

### 2. 経験録の集計結果（表 1）

経験録は妊婦 9 項目、産婦 13 項目、出生直後の新生児 2 項目、新生児 13 項目、褥婦 10 項目の計 47 項目である。

#### 1) 妊婦

技術項目は 9 項目であり、実施はレオポルド触診法 79 名（91.9%）、体重測定・血圧測定・尿検査の実施は 67 名（77.9%）、腹囲・子宮底長測定 60 名（69.8%）、胎児心音聴取 50 名（58.1%）であった。

#### 2) 産婦および出生直後の新生児

技術項目は 15 項目であり、20% 以上の学生が実施できた項目は、胎児付属物の計測と観察 19 名（22.1%）、産痛緩和（マッサージ、温罌法など）18 名（20.9%）であった。

#### 3) 新生児

技術項目は 13 項目であり、90% 以上の学生が実施できた項目は、黄疸指数の測定 85 名（98.8%）、新生児健康診査（バイタルサイン、成熟徴候、原始反射など）83 名（96.5%）、抱き方・寝かせ方 81 名（94.2%）、おむつ交換 80 名（93.0%）であった。沐浴・清拭実施は、33 名（38.4%）であり臀部浴介助、衣類の着脱などであった。

#### 4) 褥婦

技術項目は 10 項目であり、実施は子宮復古状態の観察 79 名（91.9%）、乳房・乳汁分泌状態の観察 74 名（86.0%）、全身状態の観察・査定 70 名（81.4%）、授乳援助 40 名（46.5%）、外陰部と悪露の観察 26 名（30.2%）であり、悪露交換・外陰部消毒 1 名（1.2%）であった。帝王切開術後の創部観察 7 名（8.1%）であった。

## 考察

A 大学の経験録は、実施および見学別の記載であり学生の自己チェックである。そのため、検討会報告書<sup>1)</sup>による教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるもの、教員、看護師の指導・監視のもとで実施できるもの、原則として看護師や医師の実施を見学するものと区分できない。しかし経験録の項目は母性看護学に特徴付けられる項目であり、また難易度の高い項目でもあるため、教員および看護師の指導・監視のもと実施してきた。

表 1 母性看護実習 技術経験録 集計結果 (n=86)

技術項目	見学		実施	
	n	%	n	%
妊 婦				
情報収集 (体重測定、血圧測定、尿検査)	39	(45.3)	67	(77.9)
腹囲・子宮底長の測定	32	(37.2)	60	(69.8)
児心音の聴取	58	(67.4)	50	(58.1)
超音波 (エコー)	73	(84.9)	0	( 0.0)
レオポルド触診法	44	(51.2)	79	(91.9)
妊娠反応	9	(10.5)	0	( 0.0)
NST	56	(65.1)	0	( 0.0)
乳頭の観察・手当の指導	26	(30.2)	0	( 0.0)
妊婦保健指導	48	(55.8)	0	( 0.0)
産 婦				
陣痛の測定	38	(44.2)	12	(14.0)
呼吸法、補助動作の指導	27	(31.4)	13	(15.1)
産痛緩和	24	(27.9)	18	(20.9)
分娩進行状態の観察	35	(40.7)	12	(14.0)
CTG	41	(47.7)	0	( 0.0)
分娩 (帝王切開術後の見学含む)	25	(29.1)	0	( 0.0)
アプガースコアの判定	29	(33.7)	6	( 7.0)
胎児付属物の計測と観察	34	(39.5)	19	(22.1)
出血量の測定	13	(15.1)	2	( 2.3)
分娩後のバイタルサイン	24	(27.9)	8	( 9.3)
分娩後の子宮底長の測定	18	(20.9)	11	(12.8)
子宮復古促進の看護	20	(23.3)	1	( 1.2)
清潔の援助	20	(23.3)	14	(16.3)
出生直後の新生児				
出生直後の新生児ケア	48	(55.8)		
初回アタッチメント形成への看護	37	(43.0)		
新 生 児				
環境の確認 (室温・湿度など)	44	(51.2)	60	(69.8)
感染・事故防止対策	53	(61.6)	65	(75.6)
新生児健康診査 (バイタルサイン、成熟徴候、原始反射など)	55	(64.0)	83	(96.5)
黄疸指数の測定	36	(41.9)	85	(98.8)
おむつ交換	54	(62.8)	80	(93.0)
抱き方、寝かせ方	54	(62.8)	81	(94.2)
体重の測定	71	(82.6)	58	(67.4)
沐浴 (沐浴・清拭)	83	(96.5)	33	(38.4)
臍帯の処置	83	(96.5)	20	(23.3)
哺乳と排気	71	(82.6)	29	(33.7)
身体の諸計測	43	(50.0)	9	(10.5)
ガスリー検査・Bil 検査	71	(82.6)	0	( 0.0)
医師の診察	76	(88.4)	0	( 0.0)
褥 婦				
全身状態の観察・査定	52	(60.5)	70	(81.4)
子宮復古状態の観察	63	(73.3)	79	(91.9)
外陰部と悪露の観察	37	(43.0)	26	(30.2)
乳房、乳汁分泌状態の観察	68	(79.1)	74	(86.0)
授乳援助	78	(90.7)	40	(46.5)
悪露交換・外陰部消毒	20	(23.3)	1	( 1.2)
沐浴指導	72	(83.7)	0	( 0.0)
帝王切開後の創部の観察	12	(14.0)	7	( 8.1)
退院指導	64	(74.4)	0	( 0.0)
母子健康手帳・出生届等の社会資源の活用	18	(20.9)	4	( 4.7)

## 1. 対象別の技術経験状況と今後の課題

### 1) 妊婦について

外来実習では、妊娠 37 週以降の妊婦を受け持ち対象としている。妊婦健診に関しては、A 大学の母性看護学演習において繰り返し演習した内容でもある。母性看護学実習終了後の学生アンケートに「外来実習では、実際に腹囲や子宮底長、レオポルドをさせて頂き、演習で行った内容をそのまま現場で行うことができ、良い経験となった。」とあり、母性看護学演習で学んだことが反映されたため、学生が積極的に自信を持って実施することができた結果と考える。

### 2) 産婦について

看護師教育は分娩という場面において専門職としての境界がある。対象と助産師の関係に入り込みすぎないように、しかし傍観者にはならず多くの経験（ケア）ができるように取り組む必要がある。学生アンケートに「分娩見学を通して、生命の誕生や生命の尊さを感じることができた。」とあり、分娩という緊張した状況の中で喜びを分かち合い、冷静に産痛緩和や呼吸法などの指導を実施したことは、学生にとり貴重な経験と言える。また、このことが助産師を目指すことへも繋がるものと考え。今後、産婦と助産師の関係の中で看護師として何が可能か、学生の無力感を感じさせない為の技術内容の再検討が必要である。

昨今のハイリスク妊婦の増加や少子化に伴う分娩件数の減少により、学生が産婦の看護に関わる機会がさらに減少することが懸念される。濱<sup>6)</sup>が「見学した学生の学びをもとに、分娩経過の振り返りなどから学習内容を共有していくことが必要である」と述べるように、毎日の学生カンファレンスの場において、分娩の学びを共有していくことが必要であると考え。

### 3) 褥婦・新生児について

保健師助産師看護師法<sup>7)</sup>では、看護師は「傷病者若しくは褥婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする者」と定義されている。これを踏まえ妊産褥婦、新生児を受け持ち、看護過程の展開を含め経験できる多くの

技術を学ぶことが必要である。しかし学生 2 名での褥婦の受け持ちや外陰部洗浄・消毒の中止など経験できる技術項目は減少している。さらに学生たちは、生活経験の乏しさや幼い子に触れた経験や兄弟の少なさから新生児の技術経験に対し回避感情が高まっていることも報告されている<sup>8,9)</sup>。学生アンケートに「今までに新生児や妊婦・褥婦と関わる事がほとんどなく、大学での学びだけで実習に臨んだが、楽しく実習することができた。」とあった。このことから、経験の乏しい学生に対し、自信を持って臨床実習に臨めるための教育プログラムの再検討が必要である。

## 2. 受け持ち対象の状況からみた技術経験状況と今後の課題

### 1) 正常逸脱ケースを受け持つ機会の増加

従来学生が母性看護学実習で受け持つのは、正常な妊娠・分娩経過をたどる褥婦であった。しかし、本研究では 14 名 (16.3%) の学生が正常を逸脱するケースを受け持っていた。産褥期実習において受け持ち対象者がいないために、管理入院中の妊婦を受け持った学生は、褥婦の 10 項目は経験できないことになる。また、帝王切開術後の褥婦を受け持った学生は、演習では経験していない術後の子宮復古状態の観察に加えて、創部の観察を実習ではじめて経験することになる。学生アンケートに「技術や知識が不足していて、うまくいかない点がたくさんあった。」とあり学生も混乱を生じていた。

正常逸脱ケースは観察において基準となる指標がない状態での実施となるため、技術においても難しいのは当然であり、おのずと見学が増える。臨地実習では、学生はさまざまな体験を通して成長していくが、五感しかも手を通して学ぶ機会が減っていくことは、技術習得に関してはマイナス要因である。母性看護学実習では、正常を逸脱するケースを受け持つことが常態化し、正常を学びその後異常を学ぶといった経過を辿ることが困難になっており、今後演習内容や講義内容など、現状に合わせた教育プログラムの再検討が必要である。

## 2) 演習と実習での技術体験の齟齬

多くの看護教育機関において、新生児の沐浴技術は習得技術に挙げられており、A 大学でも沐浴技術を演習で教授してきた。しかし、エビデンスの観点から沐浴を中止した施設もある。

難易度が高い沐浴を演習し評価していながら、実習で実施できないことは、学生にとって不利益となる。また演習したことの統合ができる実習内容であることが、学生のモチベーションの維持や達成感につながると考えるが、学生アンケートに「演習で沐浴を実施したが、実習では行うことができなかつたことは少し残念。」とあった。このように学生が達成感を味わうことができなかつた現状を踏まえ、今後演習項目について検討する必要がある。

## 3. 母性看護学実習における教育的配慮と今後の課題

学生は実習において、限られた時間の中で既習の知識や母性看護学演習で学んだ技術を活かし、対象者にあつた看護展開を行い、看護実践能力を身につけていく。学生アンケートに「短時間でセクションが変わるのは大変だった。」とあり、慣れない実習場面において、緊張や戸惑いを感じる学生も少なくない。特に男子学生の母性看護学実習における戸惑いは、女性学生に比べ大きいと思われる。A 大学の産褥期実習では、男子学生は女子学生とペアになり受け持ちをしており、またペアリングにも配慮することで男子学生は女子学生にも劣らない大きな学びができていく。A 大学の平成 21 年度 3 年次生の男子学生は 4 名 (4.7%) であったが、平成 22 年度は学年の一角を占め、今後も男子学生の割合が増加すると思われる。伊藤ら<sup>10)</sup>の研究では、男子学生は「実習初日の訪室」、<sup>10)</sup>「産褥期の変化の観察」、<sup>10)</sup>「家族とのコミュニケーション」の場面において不安や戸惑いを感じ、教員・指導者に助言を求めていたと報告している。このことから、実習場面において男子学生への教育的配慮はもちろんのこと、実習施設や臨床指導者、また妊産褥婦の男子学生受け入れの理解が求められる。学生アンケートに「産褥期は一番

情報も記録も多いので、学生 2 人でできて良かった。」とある一方で「褥室実習では、褥婦さん 1 人を学生 2 人で受け持ったので、自分のペースでケアできない感じがして少しやりにくかつた。」とあった。受け持ち褥婦の確保が難しい昨今、受け持ちスタイルを変えることは困難であるが、学生の不利益とならないよう配慮が必要である。

母性看護を特徴付ける技術は、難易度が高く教員および看護師の指導・監視のもと実施することが原則である。この原則の中で教員および指導者は、過保護になり過ぎるのではなく、学生が自主的にマネジメントしながら、積極的に実習に取り組めるような働きかけが必要であると考える。

## 結 論

母性看護学実習における学生の技術経験状況と今後の課題は、以下の通りである。

1. 外来実習における妊婦健康診査では、母性看護学演習を活かし 91.9% の学生がレオポルド触診法を実施していた。
2. 分娩を見学した学生は 19 名 (22.1%) であり、産婦、助産師の関係の中で看護師として何が可能かを検討してゆく必要がある。
3. A 大学の母性看護学演習項目の沐浴 (沐浴・清拭) 実施は、33 名 (38.4%) であり、実施内容は臀部浴介助、衣類の着脱などであった。
4. 病棟実習の産褥期実習では、帝王切開術を受けた褥婦を受け持った学生が 12 名 (14%)、産褥期の対象者がいないため管理入院中の妊婦を受け持った学生が 2 名 (2.3%) であり、合計 14 名 (16.2%) の学生が正常を逸脱するケースを受け持っていた。

## 文 献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会報告書：大学における看護実践能力の育成に向けて。文部科学省高等教育局医学教育課 2002
- 2) 看護学教育の在り方に関する検討会報告書：看護実践能力の充実に向けた大学卒業

- 時の到達目標. 文部科学省高等教育局医学教育課 2004
- 3) 安酸史子: 臨床実習教育の理論, 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック. 医学書院 東京 pp8-41 2001
  - 4) 小山田信子、杉山敏子、他: 看護学生の母性看護実習領域における看護技術経験状況の調査. 東北大学医療技術短期大学部紀要 **10(1)**: 41-50 2001
  - 5) 厚生労働省医政局看護課 看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会報告書. p3 2003
  - 6) 濱 耕子: 基礎看護教育における母性看護実習の取り組みと今後の課題 - 診療所実習を併行して -. 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要 第 5 巻 :81-89 2004
  - 7) 看護行政研究会編: 看護六法 H22 年版. 新日本法規出版 名古屋 p3 2010
  - 8) 濱 耕子: 母性看護実習を受講する学生の対児感情の変化の特徴. 三重看護学誌 Vol.9:83-88 2007
  - 9) 榎原文枝、岡部恵子: 新生児との接触体験が対児感情に与える影響 - 母性看護学実習前後の対児感情の比較を通して -. 母性衛生 **42(3)**: 315 2001
  - 10) 伊藤千恵、松井幸子、他: 男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察. 群馬パース大学紀要 No6:81-89 2008

連絡先: 菊地美帆  
〒 943-0147 新潟県上越市新南町 240  
新潟県立看護大学看護学部  
Tel:025-526-2811 Fax:025-526-3107  
E-mail:kikuchi@niigata-cn.ac.jp

## Technical Experience and Future Issues in Maternity Nursing Students —From the analysis of practical training records in maternity nursing—

Miho KIKUCHI, Yoko TAKASHIMA, and Michiko NAKASHIMA

Niigata College of Nursing

### Summary

We determined current technical experience and future issues in maternity nursing training in students of the department of nursing of A college by summarizing practical training records kept by individuals after obtaining consent. Descriptive statistics were used to analyze the 47-item practical training records collected from 86 nursing students in the third grade in 2009. The results showed that 72 students attended to puerperants who followed a normal course after childbirth; 12 students attended to puerperants who delivered by Cesarean section; and 2 students attended to pregnant women hospitalized for maternal control. More than 90% of students had technical experience of providing Leopold's maneuver in pregnant women, and also of health examination, evaluation of jaundice index, changing diapers, holding a baby in the arms, and laying a baby down in neonates. Nineteen students (22.1%) observed a delivery and 33 students (38.4%) gave newborns a bath or blanket bath, mainly helping dress or undress babies and wash the buttocks. An increase in high-risk mothers, concurrently with a decrease in childbirth, has a major influence on practical nursing training. Future studies need to review the existing practical training and methodology of maternity nursing in further accordance with the reality.

(Med Biol **155**: 142-148 2011)

**Key words:** Maternity nursing, practice, technical experience, issues

Correspondence address: Miho KIKUCHI  
Faculty of Nursing, Niigata College of Nursing  
240 Shinnan-cho, Joetsu city, Niigata, 943-0147, Japan  
TEL: +81-25-526-2811  
Fax: +81-25-526-3107  
E-mail : kikuchi@niigata-cn.ac.jp

